

今年最後の祈念式は、857回目となる式で、朝から4年生が献花用の花を持ってきてくれました。ありがとうございました。

今日の祈念式は、4年生の先生から「永井隆博士と永井坂」についてのお話がありました。

また、この日は祈念式に続いて人権集会も開催され、人権週間中の全校や各学級での取組の発表もありました。集会の最後には、全校で「ビリーブ」を歌いました。

平和祈念式の話の概要は以下のとおりです。



○永井隆博士は、浦上の地に生きたお医者さんである。昭和7年から長崎大学病院のレントゲン科の医師として活躍した。

○博士は、多くの人の命を救うために研究に打ち込み、どんなときも明るくふるまい、患者の治療を一生懸命に行った。

○1945年8月9日、この日病院のレントゲン室で研究をしていた博士は被爆した。吹き飛ばされ、目の上と耳のところにけがをして大量に出血したが、

自分の治療は後回しにして救護を求めてくる人々の治療に当たった。

○次の日も、その次の日も治療に走り回っていたが、1946年7月、つまり被爆してから1年後、ついに原爆症によって寝込んでしまった。

○動けなくなった博士は、近所の人々の好意で、小さな住まいに住むことになった。それが現在の「如己堂」である。

○動けなくなっても、博士は人々のために何かをしたいと考え、自分の体を使って原爆症の研究をしたり本を書いたりして原爆の悲惨さや平和の尊さを訴え続けた・



○永井博士の名前がついた坂が城山小学校にある。永井博士が書いた本が売れたお金で、1000本の桜の苗木を買い、草も木も生えないと言われた浦上の地を花でいっぱいにしてほしいと、遺族の方がいろいろなところに寄贈してくださったものである。

○城山小学校には100本の苗木が贈られ、当時の正門であった今の永井坂のところと運動場に植えられた。

○1991年の台風によって大きな被害を受け、今植えられている永井桜は、その後、寄贈された苗木が大きくなったものである。



如己愛人
によこ あいじん

○永井博士が「如己愛人」という言葉を遺している。「周りの人も、自分と同じように愛する」という意味である。

○ちょうど今、人権週間。自分と同じように人を大切にすると、争いごとはなくなります。



祈念式後の人権集会で「ビリーブ」を歌ったとき、企画・運営委員会の子どもたちが歌に合わせて手話をしながら歌っていました。

